

津田昇平教話 第六話

令和三年一月六日 朝の教話

食物はみな、人の命のために天地乃神の作
り与えたまうものぞ。何を食うにも飲むに
もありがたくいただく心を忘れなよ。

おはようございます。令和三年一月六日をお迎えすることができました。

今日も天地の神様から、人として正しい生き方、天地の道理に沿った
生き方を教えて頂いておりますから、その教えをまたお互いに学ばして
頂いて、今日一日を神様と共に生きるお稽古、信心生活と申しますけれ
ども、神様と共に生きるその信心生活を、今日一日、新しい紙を頂いて
おりますから、お稽古させて頂きたいと思えます。

困った時に神様にお継りすがしておかげを頂くということは大事なんです
けれども、お願い参りというのと、信心参りというのがあって、まあ

困った時はお願い参り、神様にお縋りをしたい時ですよ。それはそれで大事なことです。でもおかげを頂いて、それで信心をやめてしまうというのは、それはあまりにも勿体ないところだね、本当に神様のありがたいことを分かって頂いて、信心生活がとても大切であるということ、私たちの人生が豊かになり、おかげを頂ける生き方になるんだということ、そこを学んでいくことが大事やと思います。そのためにはお願い参りというのは別に、おかげを頂いてからの信心参りが大事になってきます。

信心参りというのは、一言で申したら、信心の勉強に励む、学びをさせて頂く。手習いと同じように、よく通って、学ばせて頂く。学校に通う

んでも、やはり学校に毎日通っていると、学ぶことは多いですね。世界には、学校に行くことができずに学ぶ機会がないという、そういう子もたくさんおられると思いますけれど。でも日本の場合は、たいへん、そういう意味においてはお守り頂いて、恵んで頂いてますから、誰もが教育の機会均等を受けておりますし、学校に行けば必要な知識、生きていく上で必要な知識なども身に付けることは、ある程度できると思います。

でも、人間としてどう生きるかということについては、なかなか学ぶ場所がないんですね。だからこうして、人として、どうこの世、この世界を生きていくのか、天と地の間で生きていくのかを学ばせて頂くとい

うことが、この世に生を受けた者として、いつお国替えるか分かりませんけど、その日まで、わが身をお稽古けいこにして、神様から教えて頂いている教えに基づいて、それを手本にしてお稽古していけば、だんだんと身に付いてくる。そしておかげは頂ける。身の上のことなんなりともね。

目に見えるところ、目に見えないところ、身体、心、財、人間関係、仕事、家庭、学校、肉体もたましいも、おかげを頂いていくことができる。

自分だけではない、家族、いとこの端まで、千人、万人、御霊様みたまも含めて、皆おかげが頂ける。そういう御道おみちにご縁を頂いておりますので、やはり日々の暮らしは大事やなあと思います。教祖様は神様に願われて、お参りをされる方にいろんな話をされるんですけれども、御道の信心は、

日々の暮らしに根付いているところというのが特徴的ですよ。

例えば、食事を頂くということについても、たくさん教えがござい
ます。食事というのは、私たち人間がこの世に生を受けて、生きてい
る限り、飲む、そして食べるということが必須ひつすなわけですよ。これがない
と生命活動を維持できません。それは、生きとし生けるもの皆そうだと
思いますけれども、これも皆、天地の神様のお恵みだから、そこを大切
にありがたく頂きましょうという、そういう教えがございませぬ。

いわゆる食前訓しちへんくんという教えがあるんですけれども、食前訓というのは、
食事を頂く前に、お唱えするみ教え、食前訓ですから、訓示という言葉

で考えたら、神様からのお言葉として、それを改まって受け止めさせて頂くといい、そういう意味合いやと思います。それを食事の前に頂いて、それから心をしっかりと整えて頂きましようという、まあそういうことなんだろうと思います。

ちなみに食後訓じやうごくんというものもあります。食事を頂いた後、頂いたところ、ちんちんという心で頂いたら良いのか、人として神様の御心みこころにかなうのか、天地の道理てんちにかなうのかということもご理解下さっています。

食前訓じやうぜんくんというのには、二つの教祖様のご理解で成り立っています。どちらちからも神訓しんくんやっただと思いますけれども、一つは、

食物はみな、人の命のために天地乃神てんちのかみの造り与あたえたまう
ものぞ。

一理解Ⅲ 神訓一・一三一

というみ教えがありますね。

「食物はみな、人の命のために天地乃神の造り与えたまうものぞ」これが前半になりますね。食物は食物ですから、スーパーで売っているような食物、八百屋さん、果物屋さん、魚屋さん、お肉屋さん、いろんなところで食物がありますね。まあもつと言えば、ワンちゃん、猫ちゃんだつて、ペットだつて食物は頂くわけですから、何もかも人の命のため

ていうよりは、動物のためにとってのことだっというのも、もちろんあるわけですけども、要するところ、今、これは食事の前に頂くということを考えたら、じゃあ今から頂きますっていった時に、テーブルに、例えばご飯とお味噌汁みそしる、パンでも良いんですけども、まあご飯とお味噌汁があったと。そしてお箸はしがあって、じゃあ、今から頂くつという時に、唱えるわけです。

「食物はみな」って言う時の食物っていうのは、今日の前に、今、私の目の前に用意して頂いている食物、食事、まあこれを考えたらまず一番分かりやすいかなと思います。今、目の前に置いて頂いている食物というものは、神様は人の命、もっと言ったら私という命、私という一人の

人間の命のために、天地乃神様がお造り下さって、お与え下さっているものなんだ、ということですね。

で、後半には、どんな食前訓があるかと思いましたが、

何を食うにも飲むにも、ありがたくいただく心を忘れなよ。

〔理解Ⅲ 神訓二・一五〕

「何を食うにも飲むにも、ありがたくいただく心を忘れなよ」もちろん前半の教えと後半の教えの二つのみ教えで成り立っています。まあ、元々

は別々なんですけれども、その二つが合わさった状態で、食前訓として、
私たちは大切にしておりますけれども、食物というのは、天地乃神様が、
「お天道様てんとうがお照らしなさるのもおかげ」という教えもありますけれど
もね、

お天道様てんとうのお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるの
もおかげ、人間はみな、おかげの中に生かされて生きて
いる。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活を
し、おかげの中に死んでいくのである。

っていう、そういうご理解がありますけれども、そのままなんですよね。
お天道様がお照らし下さり、雨が降り、そしてあらゆる植物は育ち、そ
の中で、その育った食物を頂いて、生きとし生けるもの、またそれを頂
く。植物を頂いたり、それをまた、動物を頂いたりしながら、食物連鎖し
ていくわけですよ。これ皆、お天道様がお照らし下さらなかつたら、
もう育たないですからね。雨が降らなかつても、これも、何も育たない。
生きるということができない。水や空気や全部そうですよね。この天地
のお恵みがあって、今、目の前の食事というものが出来上がってるんで
す。スーパーが作ったわけではなくって、この天地、宇宙、一切合切を司

しうたいがくさい

るその神様のお恵みの中で、その中で食物というものが出来上がっている。

で、命というのは、命を食べるということが必要なですよ。食物を頂いて、そして、自分の命を繋いで頂くという、そういうものになっております。だから「食う」「何を食うにも飲むにも」「何を食べるにも飲むにもありということですね」「食う」ってというのはね。何を食べるにも飲むにもありがたくいただく心を忘れないように。「ありがたく」というのは、漢字で書きましたらね、「有る」ことが難しい「と漢字で書くんですね。有る」ことが難しいと漢字で書いて、「有^あり難^{がた}く」と言います。だからどんなものも、天地の神様がお造り下さったものだから、頂く時には有り難く、当たり

前じゃない、有り難くいただくというのを忘れないようにしましょう、というふうにしてご理解下さっています。

考えたら、お米一粒作るということも人間にはできないんですよ。できること言うて、皆さんできませんやろ。お米というものを、そもそも生命として存在させることもできないし、お水が必要、お天道様が必
要って、土が必要で土も作るということもできんし、水を作ることもで
きないし、お天道様を作ったわけでもないし。まあせいぜい、環境整備
でしょうね。いや、それだって自分の力でできてるわけじゃない。自分
の命が動いているのは、天地のお恵みの中で生きているわけで、生かさ
れているわけだね。そしたら、何もかもが一切合切、本当は天地のお働

き、神様のお働きを頂いて、食物というものに辿りついとるわけですね。^{たど}
作るにしても、頂くにしてもそうです。だから、当たり前と思ったらいかんよ、いうことですね。これお恵みなんやで、と。天地のお恵み。天地というのは、^{てんちかねのかみ}天地金乃神様のお身体ですから、天地というのはすなわち、神様なんですね。神様って言うたら、すなわち天地になります。で、この天地のお恵み、神様のお恵みというものだから、何にしても当たり前のように思ったらいかんと。ありがたく頂くというところを忘れないようにしなくちゃいけないということをお教え下さっております。

食事を頂くということをせずに生きてる方っていないですよ。時に入院して、食事をなかなか頂くことができずに、点滴という形で、食事

の代わりに頂くということとは、もちろんそういう方もいらっしゃるでしょうね。でもそれにしたって、口で頂くのが食事とえば、栄養分を頂いているので、それも食事の一つと言ったら、極端に言ったらそうかも知れません。でも基本的に、頂くということは毎日してるんですよ。三百六十五日、やはり、飲む、食べるということをしていないことはないんです。

これ、すごく、日々の生活の中で毎日のようなことですから、当たり前になりがちなんですよね。でも、ここがすごく大切になってくるんですよ。ものすごいこう、目に見える大きな大きな、誰が聞いても分かるようなおかげ頂いた、こんなおかげ頂いた、究極的に助けて頂いたとか

ね、それはそれで大切なんですけども、でも、日々の何気ないところ、当たり前のように過ぎ去ってしまうところ。信仰がなければ、「そんな当たり前前の話やん」で済んでしまうようなところこそ、実は神様の深い思し召しやら、御思い、御心、慈愛っていうのがあるんですね。

毎日のように、頂くことが出来る。毎日のように、用意されている。毎日のように、お布団で寝ることが出来る。毎日のように、お手洗いに
行ける。毎日のように、目が見えて、耳が聞こえて、手足が動く。こうい
う、当たり前と言えば当たり前で、何もありがたいというわけでもない
ようなこと。もっと言ったら、信心していなくたって、皆頂けているよ

うなもの。でも、実はそれは、ものすごい大切なところなんですよね。

で、ここが当たり前じゃなくって、こういう何気ないところがありがたい、天地の^{てんち}大恩^{たいおん}であるって、教祖様は仰るんです。天地の大恩として、大きな恩として、そこをどれだけ、私たち分からして頂いてるかということろが、実は信心の中で一番、根本的に大事なところなんですな。

痛い痒い^{かゆ}が治ったってこと、これ大事なんですよ。きっかけになりま
すしね。そうなんですけれども、でも、いよいよの本質的なところで考
えましたら、天地から恵んで頂いてる、当たり前のように日々頂いてい
るものが、どれだけありがたいかというところが、そこを^{さと}悟るとい
うのが、それを深く分からして頂いていくというのが、これが実は一番

肝心要かんしんかなめのところ、扇あふぎの要かなめなんです。ここを忘れたらいけないですよ。
ね。

もっと言うたら、人間が難儀なんぎになるといいうのは、ここを外れるから難儀になるんです。難儀なんぎになってから、おかげが頂けるようになって、まあ信心する人も多いですわね。それはそれで結構です。けれども、「おかげを頂いて良かった」じゃ、これじゃダメなんです。これはお願い参り。

信心参りといいうのは、人間がそもそもめぐりを積むといいうのは、天地に対して知らず知らずにご無礼、つまり無礼むれいといいうのは、礼が無いこと、ということ、感謝がない、恩を感じていない、理解してない、ということ

なんですね。

天地の大恩というのは、信心しているとかしていないとか関係なくて、^{あまね}遍く皆頂いているんです。お天道様てんどうが昇あって日を照らして下さる。これ、どんな人にも皆、遍く頂いているものでしょ。平等に。これが、ありがたいということ。みんな頂いてるんやったら、自分だけ特別じゃないんやったら、ありがたくないということじゃないです。これがなかったら人間、もっと言えば私という人間は、もう存在すらできないんです。もうその瞬間に凍ってしまいますからね。そこをどれだけよく分かっているのかということ。人と比べるんじゃない、自分と天地の間柄まがらの関係の中で、どれだけ自分は恵んで頂いて、それを享受あつじゆうして、それを頂いて、恵

んで頂いて、それを頂いて、生かされて生きているのか。それは一つひとつ、天地が自分を生かそうとする、「慈愛じあいの現れなんですね。」
それとどれだけよく分かってくれてるんかいなあ…」
って言うのが、神様の御心みこころ。「それを分かっているか」といかに「って仰ったのが教祖様。それを分からずに、「無礼している。礼が無い、お粗末がある、不行き届きがある。そうやって、めづりを積んで難儀なんぎになっているのが人間。だから、信心として頂く」といふのは、そういう、無礼から、礼があるような、礼が生まれてくるような、感謝が生まれてくるようなところ、そこが大事なんです。

でも、目に見えて「ごっついおかげ頂いたからお礼を言っ」というのは、

まあそれはね、別に信心じゃないとまでは言いません。これもまた信心のきっかけにはなるんですけども、でもそれだけでは、拝み信心になる。おかげ信心になる。それはそれで大事ですけども、おかげ信心というのは、もうそんな時だけ頂いたら、もうそれでええわというような、そんな感じですよ。でも、そういう一攫千金いつかくせんきんのようなものでなくって、日々頂いているおかげというのが、とっても大事なんだ、と。それ、当たり前じゃないんだと。その日々頂いているおかげを、どれだけ私たちがありがたく、深く、感じる事ができるのか。それによって、本当の意味で救われていく、幸せになっていくということも繋がつながってくるんじゃないかと思えますね。

だから、遠くを見なくともいいんです、神様のおかげを頂いているかどうかって。目の前のこと。服を見たらいいし、食事を頂いたら、食事を頂ける時は食事を見たらいいし、蛇口じやぐをひねって水が出たら、水を見たらいいし。今、私、メガネを掛けさせてもらってますけど、朝になったらメガネを拭く時には、やっぱりいつもお礼申させてもらいます。これじゃなかったら不自由ですもんね。ありがとうございます。目が見えることもありがとうございます。お手洗い行ってもありがとうございます。トイレのお世話になってありがとうございます。歯を磨く時みがもありがとうございます。歯ブラシにもコップにも水にもありがとうございます。歯にもお礼を申させてもらう。靴くつを履く時はもありがとうございます。脱

く時もありがとういびいます。って、やっぱりしてるんですよ。

これ、靴があって当たり前、歯磨きができて当たり前、お手洗いに
けて当たり前、食べることができて当たり前。ほんとですか？…なんか、
騙だまされてません？それが当たり前であると。失ったら分かるということ
は、まあ、あるんですけれども、でも失ってからじゃ、勿もつた体ないですから
ね。

一時ごうとだけ体調を崩して、食べれないとか、眠れないとか、歩けないとか
いうことだあってあると思います。それは一つ、ちょっと立ち止まって振
り返るチャンスを頂いてますね。そこでまた、頂くことができていると
いうことが、当たり前ではなくって、ありがたいということなんだとい

うことを、立ち止まって振り返らして頂く、大事なきっかけになりますね。そこで、感謝をしてもらおう。でもそこでね、だんだんすぐにまた時間が経ったら当たり前になってしまうというのが、人間の情けないところ。でもそこで、すぐに当たり前になってしまう、そういう自分に戻ろうとする怠惰たいだな自分、愚かな自分おろがいるわけですが、そう安易にそこに行くんじゃなくて、これは、日々頂いていること、ありがたいんだということをお分かっていきなさいよって。

お天道様てんとうのお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげ、人間はみな、おかげの中に生かされて生きて

いる。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである。

一理Ⅱ 利守志野としもりしの 一一

「おかげの中で死んでいく」という理解をしても良いんですけども、教えとしては、「おかげの中に」なんです。方向なんですよね。おかげの中に、突っ込んで死んでいくんです。「おかげの中に生まれ」おかげの中に生まれてきて、おかげの中で生活をして、おかげの中に死んでいくんです。

おかげの中に生まれて、育って、そして、この世に生を受けて生まれて、オギヤーと生まれてその中で生きて行く。そのために食物も大事やし、お風呂も大事やし、はいせつ排泄も大事やし、運動も大事やし、いろんな、私たちが当たり前というふうにして考えているようなものが多々ある。それは皆、ほんとは神様に恵んで頂いているんです。それを当たり前やと騙されてるんです。

戦争でも起こったらもう、食べることも、飲むこともできない。命があって当たり前なんて思えない。ぐっすりと眠れたり、お風呂にゆっくり入れたり、そんなんが当たり前じゃないと分かるんでしょかね。でも本当は、こうして、日々の暮らしができるということが、実はとてつ

もなく大きなおかげなんだということをし、そこを分かるということ
とが大事なんです。

そこを本当に芯しんから分からして頂くということが信心の大事なところ
で、それが分からずに、ご無礼が重なってめぐりになって、大難だいなんが多々
生まれてくる、代々積まれていくということなんです。

じゃあその反対になったら、天地てんちの大恩たいおん、神様のお徳、御神徳ごしんとくというも
のを頂いて生かされて生きてるということを悟さとる。芯しんから分からして頂
いて、それを離さずに生きていくこと、お稽古けいこしていくのが本当の意味
での信心生活になるんですね。手元を見ましょ。足元を見ましょ。遠く
は見なくていい。今日の前にあるもの全てが、実は当たり前じゃないと

いらして、そこに気付いて、その中で、恵んで頂いている中で、神様の
慈愛じあいの中で、生かされて生きている。そして、いずれお国替えするんで
も、おかげの中に向かって死んでいくんです。おかげの中に死んでいく
んです。飛び込んで行くんです。おかげの中に生まれるんです。おかげ
の中で、生活するんです。そして、おかげの中に死んでいくんです。幸せ
でしょ？

そこを分からして頂くというのが、御道おみちの信心の大事なことやなあと
思います。今日は、そのようなお話をさせて頂きました。このこと、また
心に、ちょっとかけて頂きながら、今日一日を過ごさせて頂けたらなあ

と思います。

今日も、お手洗いや行ったり、食事したり、靴履はいたりすると思うんですけどね、その時にでも、ああこれ当たり前やないんやなあ、ありがとうでございます。お布団に入れる、ありがとうなあ。おこたつある、ありがとうなあ。みかんでも食べようか、ありがとうなあ。ああ、今日はええ天気やなあ、ありがとうなあ。何でも、当たり前のことではないということ。家族がいる。話ができる。見える、聞ける、触れられる。ありがとうことやねんな。当たり前じゃやないんやなあ。…っていうことばーっかりですから、そこを感じながら、その気付いたその瞬間でいい、その時でいいです、何もわざわざ参って手を合わせた時だけお礼を言うっていう

んじゃなくて、その時、その都度、いつでも、どこでも、何しても、心を神様に向けて、「ありがとうございます、神様。お世話になります」「って、お礼を申して、お願いして、過してみたいんです。そうするって、神様のおかげというのは、たくさん頂けるようになっていくんですよね。それが一番の、めづりのお取り払いになってきますからね。

はい。今日もおかげを頂きますように。よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第六話

令和三年一月六日 朝の教話

令和四年一月八日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七―五
